

一般演題) 犬の皮膚感染症から分離された *Staphylococcus pseudintermedius* の
薬剤感受性

¹東京薬科大学 薬学部 病原微生物学教室

○中南 秀将¹、野口 雅久¹

【目的】犬は愛玩動物（ペット）として、本邦では5世帯に1頭が飼育されている。犬の常在ブドウ球菌の一つとして、*Staphylococcus pseudintermedius*が知られている。近年、ペットとして飼育されている犬からメチシリン耐性 *S. pseudintermedius* (MRSP) の分離が報告されている。そこで、本研究では、犬の皮膚感染症から分離された *S. pseudintermedius* について、各種抗菌薬および消毒薬の感受性と薬剤耐性遺伝子の保有状況を調査した。

【材料・方法】菌株は、2009年5月から2010年9月にASC皮膚科において、浅在性膿皮症の犬から分離された *S. pseudintermedius* 100株を使用した。各種薬剤感受性は、寒天平板希釈法により測定し、最小発育阻止濃度 (MIC) から判定した。抗菌薬として、β-ラクタム、キノロン、マクロライド、リンコマイシン、アミノグリコシド、ミノサイクリン、バンコマイシンを使用した。また、消毒薬として、色素、四級アンモニウム塩、クロルヘキシジンを使用した。各種薬剤耐性遺伝子の検出および SCC*mec* タイピングはPCR法により行った。

【結果・考察】調査した *S. pseudintermedius* のうち、51株 (51.0%) がMRSPであった。SCC*mec* タイピングを行ったところ、市中型のMRSAに多いtype IVが3株 (5.9%)、type Vが15株 (29.4%) 存在し、33株 (64.7%) が分類不能であった。薬剤感受性を調査したところ、MRSPの90.2%がキノロン、88.2%がマクロライド、56.9%がゲンタマイシンに耐性を示したが、各種消毒薬には高い感受性を示した。薬剤耐性遺伝子の検出では、MRSPの92.5%がアミノグリコシド耐性遺伝子、88.2%がマクロライド耐性遺伝子を保有していたが、消毒薬排出遺伝子を保有する株は認められなかった。本研究から、ペットとして飼育されている犬の皮膚感染症から、高頻度で多剤耐性MRSPが検出されることが明らかとなった。

会員外共同研究者：村山 信雄、永田 雅彦 (ASC皮膚科)、竹村 智行 (東京薬大)